

博士学位論文審査要旨

2016年6月24日

論文題目： ルワンダ農村の飲料水供給をめぐる住民意識の考察
ーソーシャル・キャピタルとの関係性を中心にー

学位申請者： 乾 敏恵

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	峯 陽一
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	内藤 正典
副査：	高等研究教育機構特定任用研究員（助教）		上田 光明

要 旨：

本論文は、アフリカの新興国ルワンダの水供給にかかわる実践的な政策研究と、開発におけるソーシャル・キャピタル（SC）の有効性をめぐる計量研究とを結びつけた、意欲的な博士学位論文である。

序章は、論文の問題意識を説明するとともに、1994年に80万人もの市民が犠牲になったとされるジェノサイド事件を含めて、ルワンダの現代史を概説する。ルワンダは、近年の急速な経済成長によって他のアフリカ諸国の発展モデルと見なされるようになった。だからこそ、ルワンダの近年の開発経験の強みと弱みを客観的に精査する必要があることが指摘される。

第1章では、世界・アフリカ・ルワンダの三層において水問題の大切さが論じられる。感染症問題に引きつけて、農業用水だけでなく飲料水の質にも着目すべきであることが指摘される。

開発研究においては、水管理をめぐる開発プロジェクトの実施にあたってSCが大きな役割を果たすと主張されることが多い。民営化の進行を背景に、水供給を持続可能にするためには受益者が利用料を支払うことが重要であり、そのためには住民の相互的な信頼が不可欠だと論じられる。第2章ではSCの基礎理論を紹介した後、SCと水管理に関する先行研究を整理し、「信頼」という変数を、ケーススタディによってさらに深く考究する必要性があることが指摘される。

第3章では、ルワンダの調査地の概略およびアンケート調査の結果を記述する。続く第4章では、住民のSCの程度が水に関する意識に影響を与えているという研究設問が提示され、SC（ここでは住民相互の信頼）を独立変数、水に関する意識（水の重要性、水源管理の重要性、水の味および水の味への満足度）を従属変数とするロジスティック回帰分析の手順と結果が提示される。その結果、ルワンダの調査地においては、住民間の信頼の高さと水に関する意識の高さには相関関係が認められず、したがって、住民の信頼の度合いを上げることが飲料水に関する意識の向上に必要であるとは言えない可能性がある、という結論が導き出される。さらに追加的に「世界価値観調査」のルワンダに関するデータを使ってロジスティック回帰分析を行い、結論を補強する分析結果を示すことに成功している。

第5章では、このような統計的な結論の背後にある質的な要因として、ジェノサイドを経験したルワンダでは住民は自己利益を中心に考え、他者との付き合いが希薄化する傾向があることが指摘される。SCに頼るのではなく、公共財としての水への平等なアクセスの保障に政府が責任をもつ必要があること、プロジェクトの実施にあたっては個々の受益者にどれだけの利益があるかを明確にする必要があることなど、重要な政策提言によって論文が締めくくられる。

SC とプロジェクト・パフォーマンスの相関を疑わない通常の開発研究の想定を覆し、両者の関係はコンテキストに応じて複雑であることを示したのが、本論文の最大の貢献であろう。ルワンダ研究を概観すると、ジェノサイド研究と近年の開発パフォーマンスの研究は分裂しており、ほとんど接点が見られない。住民の意識調査を通じて双方の研究を結びつけた論考は、世界的にも類例がないと思われる。そのような意味で、本論文のオリジナリティは特筆に値する。紛争後の復興期の開発において、新自由主義的な政策デザインの問題点を実証的に批判し、不平等を緩和する政府の役割をあらためて強調したことも、政策提言として興味深い。現地調査がきわめて難しい紛争経験国においてギリギリ可能な水準でフィールドワークを実施し、政策研究の用語法を使いつつ、開発とソーシャルキャピタルをめぐる楽観論を批判的に覆した論考として、本論文には独自の価値があり、アフリカ開発研究に対する貢献も大きい。

研究の限界としては、権威主義体制を敷くルワンダにおける調査の難しさ、それによるサンプル数の少なさ、そしてプリテストを実施できなかったなどの問題点が筆者によって自省的に指摘されているが、これらの多くは不可避的なものである。それに加えて、計量分析に入る前の1章から3章までの叙述がやや平板であり、ルワンダの水問題の全般的背景の説明も不足していること、国際社会の高い評価と国内の実態とが乖離するというルワンダの状況の政治社会的背景を十分に説明できていないこと、といった弱点を指摘することができる。それでも、本論文が調査困難な紛争経験国をフィールドとし、オリジナルなデータと手堅い計量分析にもとづいて、困難国における開発研究に重大な問題提起を投げかけた力作であることについて、審査委員の評価は一致した。以上より、本論文は、博士（グローバル社会研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2016年6月24日

論文題目： ルワンダ農村の飲料水供給をめぐる住民意識の考察
ーソーシャル・キャピタルとの関係性を中心にー

学位申請者： 乾 敏恵

審査委員：

主査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	峯 陽一
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	内藤 正典
副査：	高等研究教育機構特定任用研究員（助教）		上田 光明

要 旨：

2016年6月24日（金）午後4時40分から6時10分まで、論文内容について多角的に質問しながら申請者の学力を測る総合試験を行った。申請者は文理融合を実践する GRM（グローバル・リソース・マネジメント）プログラムに所属して大学院教育を受けてきたが、データを厳密に精査し、科学的な手法で処理し、推論の論理性を重んじる姿勢は、申請者の40分間のプレゼンで遺憾なく発揮された。計量分析にかかわる考え方、知識、技能が付け焼き刃ではなく、これまでの大学院教育で根本から身につけたものであることは、プレゼンの後の50分間の質疑応答で十分に明らかになった。ルワンダの公用語は英語であり、フィールド調査では英語でのコミュニケーション力が必要とされる。調査の手順や結果から、申請者の英語でのコミュニケーション能力は十分であることがわかった。また、ルワンダの開発研究については日本語での先行研究がほとんど存在しないため、多くの英語文献を正確にかつ十分なスピードで読解することが必須であるが、論文内容と参考文献に関する質疑応答より、申請者は英語での的確な文献読解力を有していることが証明された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： ルワンダ農村の飲料水供給をめぐる住民意識の考察
—ソーシャル・キャピタルとの関係性を中心に—

氏名： 乾 敏恵

要 旨：

本研究では、ルワンダの農村地域における住民の水に対する意識とソーシャル・キャピタルとの関係性に注目する。本研究では、ソーシャル・キャピタルを「個人の他者に対する信頼」と定義し、それがルワンダにおける農村地域の住民の飲料水に対する意識に与える影響について明らかにする。そして、ルワンダにおける給水分野の問題を解決するために、同国ではどのような給水方法が求められているのかを提示する。

本研究では水そのものおよび飲料水に注目することから、まずグローバル社会における水資源問題について取り上げ、整理する。そして、欧米諸国や日本などのドナー諸国によって飲料水に関する分野、特に給水設備の建設に関連する援助が行われていることから、上水道システムが発祥したとされるパリやロンドンや日本の上水道についても本論中で整理している。

ルワンダに関する学術研究としては、1994年のジェノサイドに関連する平和構築分野の研究が多い。しかし、ルワンダは「アフリカの奇跡」と呼ばれるほど目覚ましく発展し、ルワンダのメディアによる発表では、ミレニアム開発目標も達成の見込みがあるとされた。ルワンダの汚職は周辺国と比較して少なく、世界銀行によるビジネス環境ランキングも高い。援助のレシピエント国としてルワンダはロールモデルになりうる。そこで本研究では、平和構築よりも社会開発の観点からルワンダに注目している。

ルワンダ政府は、貧困削減とともに、国民の水や衛生に対するアクセスを改善することに積極的に取り組んでおり、欧米諸国や日本などのドナーによって、ハンドポンプや地下水を汲み上げるポンプの建設など給水設備が整備されてきていることで、改善された水源へのアクセスが増加しつつある。しかし、インフラストラクチャー、特に飲料水に関する問題があることが筆者の調査でもわかってきた。ルワンダでは、5歳未満の乳幼児の死亡原因をみると、肺炎、早産に次いで下痢が挙げられていることや、多くの場所において、ハンドポンプが故障していたり、地下水を汲み上げるポンプを稼働させるのに必要な燃料を購入できなかつたりと、給水設備が稼働できない状況になっていた。このような状況になる要因としては、水道料金を徴収し、給水設備の維持管理を行う水組合が農村で形成されていないことや、それが形成されていても、水道料金を徴収した資金で上手く水組合を運営できていないことなどが挙げられる。また、飲料水を供給する協同組合によって水道料金が大きく異なることなどがある。そこで本研究では、飲料水の中でも特に給水設備の稼働に関わる問題に注目した。稼働不足の理由としては、住民の水道料金の未払いや給水設備の維持管理に関わる人材不足などが挙げられるが、特に住民の水道料金の支払いについては、住民の水についての意識が影響している可能性がある。水への意識が低い場合には、「コモンズの悲劇」が起りうる。水は人類にとって共有の財産の一つであり、典型的なコモンズである。人口増加と「コモンズの悲劇」は密接に関係しており、人口増加の著しいルワンダにおいて個人の自己利益の最大化によって共有財が破壊されるという悲劇が起る可能性がある。

政府開発援助では水（農業用水や飲料水）の給水設備の維持管理や運営は住民に移管され、しばしばそれらの運営に関して課題が残されている。JICA 研究所の Hanatani and Fuse(2010)が提示している南部セネガルの研究は、資源の利用者がどのような要因によって資源管理に貢献するかを、集団行動との関係性の観点から明らかにした。調査の結果、ユーザーの給水施設から供給される水に対する「好み」と「満足」と同様に「他のユーザーが料金を支払っていることに対する信頼」が集団行動に影響を及ぼすとしている。他者が水道料金を支払っていると信頼していればいるほど、自身も水道料金を支払う傾向にあるということになる。

ソーシャル・キャピタルには公共財的な側面と個人財的な側面があり、前者が構造論的視点で、後者が行為者論的視点である。構造論的視点によれば、それは社会を構成する要素の一つであり、人々が意思決定を行う際には社会的な要素も考慮し、決定を行っていることになる。行為者論的視点によれば、それは行為を行おうとする個人に利益をもたらす資本形態の一つである。ソーシャル・キャピタルは、ある集団に属する人々間の信頼であり、信頼の度合いによってその集団の発展、もしくはその集団が置かれている社会の発展に寄与する可能性がある。本研究では、ルワンダの農村地域に暮らす人々が他の近隣住民についてどのように感じているのか、そしてその結果どのような行動を取っているのかについて考察するため、行為者論的視点からソーシャル・キャピタルを捉えている。ルワンダではジェノサイドによって、ソーシャル・キャピタルが危機に瀕しているものと推察される。そこで、ルワンダにおけるソーシャル・キャピタルを「個人の他者に対する信頼」と定義し、村人が他者をどれほど信頼しているかに関する調査を行った。

以上より、ドナーが水道整備の援助を行っているルワンダにおいても、セネガルと同様、信頼がプロジェクトの成否を左右する要因となる可能性があるとして、「農村における住民のソーシャル・キャピタルの高さが飲料水に対する意識の高さに影響を及ぼしている」という研究設問を立てた。

この研究設問を検証するために、2014年11月から12月にかけて、ルワンダ東部州ンゴマ郡における5セクター（カゾセ、カレンボ、サケ、ムラマ、ルキラ）を対象にアンケートおよびインタビュー調査を行った。ルワンダの農村住民の「信頼」が「飲料水に対する意識」に与える影響について調べるため、従属変数をコーディングしなおし、ロジスティック回帰分析を行った。この際、独立変数は「信頼」で、コントロール変数として、「性別」、「年齢（年代別）」、「学歴」とした。さらに従属変数は、「水の重要性」「水源管理の重要性」「水の味（良し悪し）」「水の味への満足度」とし、それぞれモデル1から4とした。本分析の結果では、各モデルにおいて信頼が統計的に有意に影響を及ぼしているものは見られなかった。しかし、ここで注目すべきポイントとして、「水の重要性」以外の3つの従属変数について β がマイナスの方向を示していることがある。統計的に有意な結果を得られていないため、信頼が「水源管理の重要性」、「水の味の良し悪し」、「水の味への満足度」に影響を及ぼしていると断定はできないものの、信頼の度合いが上昇すると「水源管理の重要性」、「水の味の良し悪し」、「水の味への満足度」が下がる傾向にある。したがって、信頼と水への満足度や意識は無関係である可能性がある。ただし、信頼が悪影響を及ぼすというわけではないし、そのような結果は得られていない。さらにこの分析の補足を行うため、2007年にルワンダで行われた第5回（Wave 5）世界価値観調査の一部の結果を用いて追加的分析を行った。その結果、筆者が収集したデータと内容が完全に一致しているとは言えないが、筆者の分析を補強するような分析結果を得た。そこで、筆者が収集したデータによる分析結果と世界価値観調査の分析結果をまとめると、住民の信頼の度合いを上げていくことが飲料水に対

する意識の向上に必ずしも必要であるとはいえない可能性がある。

以上の分析結果から、「信頼と水に対する意識は相関していない」… (A) という命題が示唆された。ルワンダにおけるソーシャル・キャピタルの代理変数として、ここではまず「信頼」を用いた。しかし、ソーシャル・キャピタルに関する議論を行っている研究者が認識しているソーシャル・キャピタル (SC1)、すなわち「信頼」や「ネットワーク (絆)」「互酬性の規範」「社会的なコネクション」などにおける「信頼」においては、それが個人がとる行動・行為の規定要素となるということを含んでいるが、ルワンダにおけるソーシャル・キャピタル (SC2)、すなわち「個人の他者に対する信頼」は、それとは別物である。調査結果を見ると、水への意識に関してソーシャル・キャピタル (SC2) は規定要素になっていない。このことから、「一般的なソーシャル・キャピタル (SC1) における「信頼」とルワンダにおけるソーシャル・キャピタル (SC2) の「信頼」は異なる」… (B) という命題が示唆される。「信頼」の意味合いが異なり、「信頼」とソーシャル・キャピタルが別物であるということから、「ルワンダにおいてソーシャル・キャピタル (SC1) は存在していない」… (C) という命題が導き出される。つまり、ルワンダの農村地域におけるソーシャル・キャピタルについては、(A)、(B)、(C) の3つの命題が同時に成り立っているといえよう。

また、調査結果からルワンダの人の特性の一つとして「自己の利益を中心に考える傾向」があることが推察される。以上の結果から、ルワンダにおいて援助を展開する際には、個人の利益を最大化することや、利益がどれほどあるのかということを確認し、プロジェクトを実施することが重要な要素の一つになりうる。同時にソーシャル・キャピタルがプロジェクトの成否を左右しないように援助をデザインすることが必要であろう。さらに、ルワンダにおける飲料水の供給では、料金や供給量の不平等や、給水設備の維持管理や組織運営に関する人材不足が起きており、ルワンダのすべての国民に十分な飲料水が行き渡っている状況とは言い難い。そこで、政府主導によるパブリックビジネスとして、平等・公平に水が分配されるべきであるという結論が導き出された。